

令和8年度 校内研修計画

新潟市立桜が丘小学校 学びチーム

1 研修主題

自分の考えをもち、友達とかかわりながら考えを深める力の育成
～自己調整力を高め、自ら学びを創造する子どもの姿を目指して～

副題について

主題にある通り、今年度は「自分の考え」を土台とし、他者とかかわりを通じてその考えを更新・深化させていく子どもを育てていきます。その過程において、子ども自身が「今の自分の学びがどうなっているかを見つめ（モニタリング）」、その時々状態に合わせて対話の相手や活用するツールなどを「自ら選び、整える（コントロール）」といった、自己調整力の育成を重視します。昨年度取り組んだ「訊き合う活動」を基盤としつつ、今年度はさらに一歩踏み込み、子どもたちが自らの学びを客観的に把握し、納得感のある解決へと自分自身で導いていく姿を目指します。また、教師自身も同様に、自らの実践を常に振り返り（モニタリング）、同僚とかかわりの中で指導法を柔軟に改善・調整（コントロール）していく「学びの姿」を体現していくことを目指します。

2 教育ビジョン（学びチーム）

重点的に育てたい 資質・能力	自分の考えをもち、友達とかかわりながら考えを深める力の育成
達成目標	「自分の考えをもち、友達とかかわりながら考えを深めることができた」と答える子どもが90%以上
重点的な取組	・ かかわって学び合う活動の充実 ・ 振り返り活動の充実

3 昨年度の成果と課題（成果○ 課題△）

（1）新潟市生活・学習改善調査、昨年度の様子から

質 問 項 目		3 年	4 年	5 年	6 年	桜が丘小 全体	市平 均
42 授業で、自分の考えを伝えています。	A+B	79.9	74.7	58.0	72.4	71.3	72.5
	A	29.9	48.1	17.3	34.5	32.3	35.2
29 授業では、ペアやグループで話し合う活動は好きです。	A+B	83.9	91.1	77.8	85.1	84.4	85.9
	A	49.4	58.2	44.4	72.4	56.3	55.0
44 学んだことや学び方について振り返る活動を行っている。	A+B	86.2	86.1	72.8	86.2	82.9	77.7
	A	34.5	54.4	23.5	44.8	39.2	35.7
46 課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	A+B	83.9	78.5	67.9	86.2	79.3	78.2
	A	33.3	36.7	19.8	46.0	34.1	34.9

* 質問項目に対する学年の割合で下段はA評価の割合を、上段はA+Bの肯定的評価を表す。

* 網掛けの数値は新潟市と比べて劣位だったものを表す。

○「学んだことや学び方を振り返る活動（項目44）」の結果と学習の様子から、自分の学びを客観的に捉える習慣は着実に身に付いているといえる。

- ・ 本校の肯定率は82.9%に達し、新潟市の平均（77.7%）を大きく上回っている。
- ・ 特に4年生（A評価54.4%）や6年生（A評価44.8%）において、自分をメタ認知することが定着している。

○「ペアやグループでの話し合い活動（項目29）」の結果と学習の様子から、他者とかかわることへの意欲が高く、心理的ハードルは低い状態にあるといえる。

- ・ 「話し合う活動が好き」と答えるA評価の割合（56.3%）は市平均（55.0%）を超えており、学級内にかかわり合える土壌がある。

△「自分の考えを伝える活動（項目42）」の結果から、考えを表出することに課題があるといえる。

- ・ 全校のA評価は32.3%（市平均35.2%）に留まり、特に5年生（17.3%）で顕著に低い数値となっている。
- ・ 振り返りで自分の課題に気付いても、それを発信して他者の視点を取り入れる「調整」の段階で立ち止まっていることが伺える。

△「課題解決に向けて自分で考え、自分から取り組む活動（項目46）」の結果から、学習への

主体性に学年差があるといえる。

- ・5年生のA評価は19.8%（市平均32.2%）と大きく劣位にあり、学年が進むにつれて受動的な学習姿勢に陥る傾向が見られる。

（2）過去の研究のまとめから

〈单元デザインについて〉

○4つの意識（目的・相手・活動・追究）を基にした单元構成により、子どもが学習の見通しをもち、自主的に活動へ向かう姿が見られた。

△教師主導の計画に留まらず、子ども自身が振り返りを通して学習計画や方法を修正・改善していく「自己調整」の場の設定が必要。

〈話し合う活動について〉

○話合いの型やICTの活用によって、多様な考えに触れ、自分の考えを広げたり深めたりしようとする意識が高まった。

△形式的な対話に終始することが多く、個に応じた手立てが不足していた。そのため、子どもの理解度に応じて必要な相手や情報を自ら選び取り、考えを新しくし続ける「学びのコントロール」という力を十分に育てることができなかった。

4 研修の内容

（1）本校における「考えを深める」ことの定義と継承

昨年度の定義である「既有（前々から持っている）の知識や技能が結びついたり、新たな知を創造（生み出したり）したりすること」を引き継ぎます。

今年度は、この「深まり」に向かう道筋において、子どもが自分の学びの状態を客観的に見つめ（自分を見つめる力）、教師が用意した解決の「手がかり」や「学び方」を自律的に選択・調整して進む姿を、「考えを深めている姿」として新たに捉えます。

【具体的な姿（例）：算数科】

- ・自力解決の途中で「今の自分は図が描けなくて止まっているな」と自分の状態を把握し（モニタリング）、解決のために「ヒントカードを見に行く」や「友達と相談する」などを自ら判断して実行する（コントロール）姿。
- ・友達の考えを聞いたり、資料を見たりする中で「このやり方、前に学習した〇〇（既習事項）と同じだ！」と、今考えていることとこれまでの学びが結びつく瞬間（深まる）を自覚し、納得感をもって解決へ向かう姿。

（2）子どもが自分から動き出すための「問い」と「見通し」の工夫

子どもが「やってみたい」「解決したい」という切実な願いをもち、見通しをもって学びを進めるために、以下の手立てを講じます。

「4つのズレ」を活かした学習課題の設定

「他者とのズレ」「予想とのズレ」「感覚とのズレ」「既習事項とのズレ」を意識的に仕掛け、子ども自身が解決の必要性を感じる「問い」を生み出します。

ズレの種類	ズレが起きた時の子どもの様相
①「他者との考えのズレ」	「自分の考えはなぜ人と違うのだろうか」「仲間が考えた方法でも同じ結論に辿り着いているのだろうか」といった問いが生まれ、自分と他者の考えを比較したり他者の考えのよさを取り入れたりしようと探究する。
②「予想とのズレ」	「予想したこととなぜ違うことが起きたのだろうか」「結果が同じになるにはどのように修正したらよいだろうか」といった問いが生まれ、自らの考えを問い直したりゴールまでの道のりを確かめたりしようと探究する。
③「感覚とのズレ」	「結果に違和感があるのはなぜだろうか」「結果にある違和感をどのように解消したらよいだろうか」といった問いが生まれ、自分の経験を見つめ直したり感覚で捉えていたことを論理的に捉え直したりしようと探究する。

④「既習事項とのズレ」	「なぜ学んだことを使ってもうまいかないのだろうか」「よりよい解決方法はどのようなものなのだろうか」といった問いが生まれ、学んだことの認識を更新したり新たな解決手段を獲得したりしようと探究する。
-------------	--

「目指す姿（学習の階段）」の共有

単元のゴールや「何ができるようになればよいか」という指標（ループリック）を、子どもに分かりやすい言葉で示します。これにより、子どもは自分の現在地を確かめ、次の段階へ進むために必要な行動を自ら考えられるようにします。

(3) 自己調整力と協働的な学びを一体化させた授業デザイン

授業の中に、「自ら選択する場」と「共に深める場」を位置付けます。

解決に向けた「二つの選択肢」の提示（自己調整）

子どもが自分の「ズレ」を解消するために、以下の二つの選択肢を授業内に準備します（実態に応じ、どちらか一方の提示でも可とする）。

「手がかり」の選択

自分の理解状況に合わせ、以下のような「今の自分を助けてくれる資料」から必要なものを選びます。

- ①既習の振り返り：前時のノートのコピー、公式や漢字のまとめ表、教室掲示など。
- ②考えを整理する補助：補助線入りの図、文章の書き出し（文型）が示されたカード、キーワード集など。
- ③段階的な課題：基礎的な計算や語句の確認から始まるスモールステップの練習プリントなど。
- ④情報源の広がり：詳しい解説が載った資料、操作できる具体物、解説動画が見られる二次元コードなど。

「学び方」の選択

その課題をどのようなスタイルで進めるのが自分にとって最適かを自分で決めます。

- ①一人でじっくり：自分のペースで、まずは自力で解決の糸口を見つけない時に選ぶ。
- ②友達と相談：行き詰った時や、自分の考えが合っているか確かめたい時に、近くの席の友達や特定のペアと対話する。
- ③教卓・相談コーナー：教職員の周りに集まり、小さなグループでヒントをもらいながら一緒に進める。
- ④ICT（端末）の活用：画面上で図を動かして考えたり、友だちの考えを画面越しに参照したりしながら進める。

「協働的な学び」の保障

一人一人が自分に合った手段で考えを構築した後、必ず「友達と関わり、考えを深め合う場（グループや全体）」を設けます。自分と異なる視点に触れることで、一人では到達できなかった深まりへとつなげます。

(4) 振り返りによる「自分を見つめる力（メタ認知）」の向上

新潟市調査（項目 44）で示された本校の強みである「振り返り」を、自らの学びを改善する力へと高めます。授業の終末に以下の視点での振り返りを行い、自分の学びの状態を客観的に捉える習慣を育てます。

結果の自覚

「5つのズレ」から生じた問いに対し、自分がどれくらい理解できているかを確かめます。

自分に合った学び方の検討

「自分にはこの資料が合っていたか」「友達との相談によって考えがどう深まったか」など、選択した方法が自分に合っていたかを振り返ります。

次時への調整

振り返りを通して「次はこうしてみたい」という改善点を見つけることで、主体的に自分の学びを整えていく力を育てます。

※上記の振り返りを日常的に用いることで子どもの自己調整力を高めることができます。しかし、振り返りは必ずしも毎時間、上記のような文章で書く必要はありません。昨年度取り組んできた以下の方法も、その時間のねらいや残り時間に応じて、柔軟に組み合わせ活用してください。

- ・適用問題、パフォーマンス課題：学習したことを使って実際に問題を解き、自分の理解度を確かめる。
- ・相互評価：友達と作品や考えを見せ合い、自分にはなかった視点に気付く。
- ・その他文章による振り返り：昨年度示した観点に従って文章で振り返りを行う。

5 研修方法

(1) 研究授業と授業交流会の実施

①研究授業

- ・職員が3つのグループに分かれ、それぞれ代表者一名を決める。Ⅰ期(6、7月)・Ⅱ期(10、11月)・Ⅲ期(12、1月)の3期に代表となった者が研究授業を行う。
- ・学習指導案は新潟市の総合教育センターHP内にある略案の形式を基に学び部が用意したものを使用する。
- ・授業日の前月にはグループ内のメンバーで検討会を行う。授業後は1時間程度の協議会を設ける。
- ・実施する教科は自由とする。
- ・授業者は授業終了2週間を目途に、指導案に最終板書と成果と課題を加筆したものを研究主任に提出する。

A グループ	B グループ	C グループ
◎吉居(5)	◎伊比(3)	◎山田(2)
○南雲(1)	○桜井(わ)	○甲斐(6)
井村(2)	石川(1)	竹中(3)
高見(4)	道下(4)	樋口(4)
栗田(6)	屋仲(5)	佐藤美(5)
三上(わ)	野水(6)	小柳(わ)
堀江(わ)	関(わ)	高山(わ)
教頭(級外)	神子田(級外)	今井(級外)
	高橋(級外)	

印がある方は学び部です。協議会など、中心となって進めます。

②授業交流会の実施

- ・研究授業を行わない全職員はⅠ期(6、7月)・Ⅱ期(10、11月)・Ⅲ期(12、1月)の3期のいずれかの間に重複しないよう授業交流会を実施する。学年間で授業前に検討会、授業後に30分程度の座談会を設ける。ただし、わかば学級においては、1～3組で一つ、4～6組で一つの学年とする。級外職員は一つのグループとする。
- ・学習指導案は新潟市の授業構想カードを使用する。
- ・授業は誰が参観しても良い。また、途中の入退室も可とする。ただし、自分の該当学年の授業は必ず参加する。
- ・実施する教科は自由とする。
- ・授業を終えた日の放課後に該当学年で30分間程度の座談会を設ける。授業の参観者も参加は可とする。
- ・授業者は授業終了2週間後を目途に授業構想カードに、板書の写真と成果と課題を加筆したものを学年部の学び部に提出する。

(2) 自主研修会の実施

- ・当校の職員が講師となり、不定期に研修会を行う。あくまでも自主的なものであるため、参加するかどうかは個人で決定する。
- ・1回の時間は質疑応答等を含め、概ね30分以内とする。
- ・研修主題と関連がないものも可とする。以下に例を挙げる。
 - ① 実践発表(教室で行っていることをそれぞれ発表)
 - ② 得意分野を生かしたミニ講座
 - ③ ICT活用やiPadの実践のシェア(実技講座も可)
 - ④ 明日の授業づくりや発問づくりを行う(道徳などで可能)
 - ⑤ 新潟市マイスターへの教科に関する質問タイム

など

6 その他の取組

(1) 家庭学習の充実

- ・全学年が自主学習ノートを用意する。
- ・「基礎基本の定着を目指すための家庭学習」と「授業につながる家庭学習」をバランスよく充実させるために、カードを活用したり、直接表を書いたりして自学に取り組ませる。

- ・学年の実態に合わせた３つのレベル別学習を示し、実施する。
(山潟中学校区学習スタンダード)
 - ・三校連携で家庭学習強調週間を設定し、家庭学習の定着を図る。
- (2) iPad 活用の充実
- ・家庭学習で iPad の活用を図る。

【年間の流れ】

